

[講演会抄録]

2012年度連続研究講座：
グローバルゼーション下の若者
第6回「グローバルゼーションと子ども
の人権侵害 ～子どもの人身売買・性的
搾取・児童労働に焦点をあてて～」

2012年12月10日

甲斐田万智子（認定NPO法人 国際子ども権利センター
（シーライツ）代表理事、文京学院大学准教授）

皆さんこんにちは。今日はとても空がきれいな良い日ですが、こんなふうにかくさんの学生の皆さんが聞きに来てくださって、とても嬉しく思っています。

今日はグローバルゼーションと子どもの権利侵害というテーマでお話させていただきます。グローバルゼーションには、安いチケットが買えるようになって、海外に簡単にいけるようになったり、Facebookなどを通じて世界中の人と気軽に交流できるようになるなど、いい面もいろいろあります。けれどもそういう気軽さゆえに開発途上国の子どもたちが搾取されるという状況も生まれています。今日はそのあたりを、グローバルゼーションの影の部分としてこれからお話ししたいと思います。

私は2003年から4年間カンボジアに住んだあと、タイに3年間住んで、2年半前に日本に帰国しましたが、その後もカンボジアの子どもの性的搾取、人身売買、児童労働の防止の活動をしています。

今日はカンボジアの話を中心にしたいと思っていますが、最初に、今、

子どもの性的搾取の問題がどんなふうの世界では議論されているかということをご紹介したいと思います。そのあとにNGOの取り組みと、簡単にカンボジア政府と国連の取り組みにも触れ、そして最後に、皆さんにできることは何かという話をしたいと思います。

1996年第一回子どもの性的搾取に反対する世界会議がストックホルムで開かれました。この会議の開催前は、各国政府が、自分の国で子どもの性的搾取が起きていることを認めようとしませんでした。しかし、主催団体のECPAT（エクパット）という団体が調査をおこなって、アジアだけで、観光客によって性的搾取を受けている子どもたちが100万人もいるという結果を突きつけました。それで、各国政府も認めざるをえなくなったのです。

この会議には政府だけでなく、NGOも参加し、そして、子どもと若者が正式に参加したということも一つの特徴でした。そして、この会議で、日本がセックスツーリストの送り出し国であり、子どもポルノの大発信国でありながら、規制する法律がないことを批判されました。それがきっかけとなって、1999年、日本で子ども買春、子どもポルノ禁止法が制定されました。その後、この会議は5年ごとに開催することが決められ、第2回の会議は日本が主催国となって、横浜で開かれました。そのときにたくさんの政府代表、NGO代表だけではなくて、子どもの代表、若者の代表も参加しました。この横浜会議では、代表になりたい、という小学生、中学生、高校生、大学生がいて、人数が多い場合は投票で代表を決めました。各国からの代表の中には実は性的搾取の被害に遭った子どもたちも参加していました。その子どもたちが「私たち僕たちのことを、ただの被害者といわないでほしい。むしろサバイバー、あるいはこの性的搾取をなくす闘いのリーダーとして見なしてほしい」というメッセージをスピーチなどで堂々と訴えていました。

この第3回目の会議は2008年ブラジルのリオデジャネイロでおこな

われ、私も参加してきたのですけれども、たくさんの政府、NGO参加者と子ども、若者の参加者が参加していました。

ここでも、残念ながら、再び日本が批判されてしまいました。現在、世界では、子どもポルノというのは、漫画あるいはゲーム、そして、アニメーションなど、実在する子どもを撮影したものではなくても、子どもを性的虐待している画像であれば、規制する、つまり法律違反とみなしていこうという動きになっています。例えば、日本製の子どもを性的搾取しているアニメを持っているアメリカ人がアメリカに帰国した際に逮捕されるという状況になっているんですね。ところが日本では表現の自由の方が優先され、これはまだ規制されていません。

‘HENTAI’ というローマ字を打ち込んでネット検索すれば子どもが性的搾取されている日本製のポルノマンガのサイトが次々に出てくるのですが、これは海外では有名で、私はこの問題に取り組むタイ人の女性から聞きました。私の娘は、当時、バンコクのインターナショナルスクールに通っていたのですが、そのことを学校みんなが知っていて、すごく恥ずかしいと言っていました。

ブラジル会議ではこのように、子どもを性的虐待するような画像を犯罪としていく共通認識がうまれたことが大きな成果でした。日本のマスコミも会議の直後は、そのことを報道していましたが、その後はほとんど報道されていません。子どもがもしこういう画像を一度でも見ってしまったら、その子どもは、「大人ってこういうことを考えているんだ」とショックを受け、残念ながら、大人に対する見方がガラッと変わってしまうのではないのでしょうか。

詳しくは、シーライトで発行したブラジル会議の報告書や横浜会議の報告書を買っていただけたらと思います。

ここからカンボジアのことをお話します。カンボジアの人身売買は90年代に深刻化しました。私が、カンボジアのこの問題に興味を持っ

たのは、横浜会議のときに被害に遭って、シェルターで保護されたカンボジアの子どもたちが、なかなかその傷から立ち直ることができずに、何度も自殺未遂を繰り返しているという話を聞き、何とかしたいと思ったことでした。また、フィリピン、タイで法律の規制が進んだ結果、子どもを狙うセックスツアーリストたちが法律の緩いカンボジアにくるようになったと知ったことでした。それで、カンボジアで活動することになりました。

カンボジアは、人身売買の送り出し国、受け入れ国、経由国と言われています。マレーシアやタイやあるいは台湾、韓国に人身売買の被害に遭った子どもたち、女性が連れて行かれると同時に、ベトナムからの子どもや女性が連れてこられたり、カンボジアを経由して、ベトナムからマレーシアに売られていくからです。

カンボジアの女性や子どもたちがなぜ人身売買の被害に遭うかという、まず貧困です。国の3分の1 (28%) の人たちが貧困ライン以下、つまり、1日を1.25ドル以下で暮らしています。そして、中学校に進むことのできない女の子の割合が3分の2 (68%)、また、貧しい家庭にとって女の子は負担という考え方がありますので、子どものときに結婚させられてしまう女の子たちが、約4人に1人 (23%) の割合でいます。その結果、どういうことが起きるかというと皆さんよりもっと年下の女の子たちが、結婚をさせられて妊娠をして、まだまだ産道が狭いところを通して赤ちゃんが生まれてきてしまうため危険なお産をします。妊産婦死亡率という、成人女性をイメージするかもしれませんが、10万人のお産あたり死亡する460人という数字の中に多くの少女たちが含まれています。そんな中、児童労働も39%、つまり2人に1人の割合で子どもたちが働かされています。(これらの数字はユニセフ『世界子供白書2012』より)

そういう状況の中で、内戦が終わったときにUNTAC (国連カンボジ

ア暫定統治機構) がつくられ海外から軍隊が入ってきて、その負の部分として、セックスワーカーが増えました。UNTACが来る前は、6,000人だったプノンベン(Phnom Penh)のセックスワーカーが、2年後に2万人に増えました。こんな中、人身売買の被害にあったのは未成年の女の子たちだったんですね。なぜかというところセックスワーカーはエイズに感染しているだろうが、処女や子どもだったら大丈夫だろうと思われたからで、子どもたちが騙されて、村から売られてきました。

「闇の子どもたち」という映画に日本人男性がスーツケースに小学生くらいの子を入れて部屋に連れ込み、その女の子を性的搾取しながら撮影する場面が出てきます。残念ながらカンボジアには子どもポルノを撮影する日本人旅行客も後を絶ちません。またこのような暴力的なポルノビデオの影響がカンボジアのティーンエイジャーに及ぼす影響は大きいといわれています。

カンボジアの子どもの人身売買には性的搾取の目的のものだけでなく、労働搾取の問題もあります。例えば、タイにカンボジアから子どもが売られてしまう分野の一つは漁業です。そうした子どもたちは奴隷的な状況の中で働かされます。なぜかというところ一旦沖に出てしまうと泳げない子どもたちは逃げることができません。そうして覚せい剤を飲まされたり打たれたりして、夜通し働かされるんです。嫌だと思っても、親方に暴力をふるわれます。逆らえば海に放り出すと脅されます。また、メイドとしてタイで働かされる場合も、「お前たちはパスポートもない、入国証もないから、たとえ助けを求めても、警察から捕まって殴られるだけだからずっと家の中にいろ」と脅され、監禁状態のような中で働かされます。

こういう人身売買の手口としては、様々なものがあります。カンボジアは縫製産業が盛んで、GAPとか、ジーユーの工場があるのですが、そんな中で、縫製工場の仕事を紹介するというブローカーやタイのメイ

ドの仕事を紹介するという言葉に騙されて、子どもたちや女性が売られていきます。

アメリカの国務省が毎年人身売買レポートというものを出していて、各国がどれだけこの問題に取り組んでいるかということをランク付けをしています。十分に取り組みが進んでいる国がランク1、取り組んでいるけど、十分ではない国がランク2、取り組みがまだまだ不十分という国がランク3に分類されます。カンボジアは2002年と2005年に経済制裁まで受けるランク3になったことがあるのですけれども、それはなぜかということ、政府が黙認していたり、あるいは官僚が人身売買ビジネスに関与しているといわざるをえないような状況にあったからです。

これだけ人身売買が起きる原因は、貧困に絡んでもう一つ、ジェンダーの問題もあります。社会全体で娘は働いて家族を助けるものという考え方が根強いと、娘が稼がなくてはという意識を持ち、危険だけれども出稼ぎに行く女の子たちが絶えないという状況があります。

カンボジアにおける子どもの性的搾取には、様々な形態があります。カンボジア政府は買春宿を何度も摘発をしているので、カラオケバーやマッサージパーラー、あるいは普通の食堂で女性や子どもが買われることがあります。

『誰にも奪われない子どもの権利』というブックレットにも紹介しましたが、カラオケバーでは、女性が番号をつけられていて、まるでもののように扱われています。また、欧米人のチャイルド・セックス・ツーリストは、わざわざ買春宿に行かなくても路上で働いている子どもたちに声を掛けて、ホテルやゲストハウスに連れていき性的搾取します。

国際養子縁組も人身売買と紙一重の場合があって、あるアメリカ人女性が長年孤児院で、子どもたちをアメリカ人に売っていたということがあり、逮捕されました。これはつい最近の例なのですが、あるベルギー人男性が少年を性的搾取し、刑に服したあとにその少年の母親と

結婚をして、その少年を息子にしようとしたことがありました。これに対して、カンボジアのNGOの多くが猛反対したんですね。それはこの少年を性的搾取するために違いない、と。そしてこの男性を国外に追放すべきだと運動を起し、成功しました。

これは、買春宿で働いている少女の写真です。たぶん10代前半か10歳以下の子どもじゃないかと思います。残念ながらこういう子どもたちを日本人が数日間にわたり監禁するというふうなこともあります。そのあとに、自分がどのように子どもを性的搾取したかということのあるゲストハウスの日記に書く人がいます。こんなふうにしたら、こんな叫び声を挙げたというようなことです。その日記は大使館が没収しました。

この写真のピンクの服の女の子が日本人男性により性的搾取の被害に遭い、このアフエシップというところに保護されていました。このとき、アフエシップが調査をして、この少女を日本人男性が買っているところに、警察と一緒に踏み込んで逮捕しました。行為を録画したビデオも残っていたので、これだけの証拠が残っていれば、カンボジアの厳しい法律で、その加害者は罰せられると見込んでいたのですが、結局その男性は、弁護士にお金を払って釈放されてしまいました。

日本大使館の人もこの女の子が性的搾取される様子を撮影したビデオを見て、本当にひどかったと言っていたのですけれども、その当時、2004年の頃までは、まだまだお金さえ払えば逃げられるという状況だったのです。

2007年にも2011年にも、ブログでカンボジアで少女を買ってきたというふうなことを自慢げに話す記事があったりしました。こんなことをやっても、別に帰国しちゃえばこっちのものだと書いてあったりとか、カンボジアの売春やっている女の子の幸せとかマジどうでもいい、と書いてあります。最近ではカンボジアが厳しくなったから、今度はミャンマーに子どもを買いに行こうとする男性も多らしく、このことを取材撮影

しているテレビ局もあります。

でも、ようやくカンボジアでも子どもを性的搾取した加害者が逮捕され、有罪判決が出るようになりました。2009年には有名なりゾートビーチで少年の裸の写真を撮っていることを通報されて逮捕された男性に禁固6年の判決が出ました。

次に、今まで子ども買春、子どもの性的搾取、人身売買ということを書いてきたのですけれども、実はそれよりももっと広範囲にカンボジアで行なわれているのが、子どもを働かせることなのです。カンボジアのような社会では、児童労働は、貧しい子どもであれば、仕方がないという意識のもと、人びとが児童労働を容認してしまっています。これに対して私たち、それは子どもの権利侵害だということをはっきりさせることにより、解決しようとしています。カンボジアでは7歳から14歳の子どもの52%が経済活動に従事しており、しかも、15歳から17歳の25万人以上が危険な労働に従事しています。

その中でも最悪の形態の児童労働に従事している子どもがたくさんいます。例えばゴムのプランテーションで働く子どもたち、それから、エビや魚と加工現場で働く子どもたち、このような加工されたシーフードは日本に輸入されています。そして、家事労働。他人の家の家事労働をするときには、9時間から13時間も働かされるなど搾取や暴力を受けています。

さらに建設現場で働く子どもたちも多いのですが、特にレンガ工場で働く子どもたちが危険なケガをするリスクにさらされています。今プノンペンには建設ラッシュ。プノンペンにも高層ビルが立ち並ぶようになってきているのです。そうすると安い労働力ということで、子どもたちが働かされるのですけれども、子どもの場合、1日10時間働いてたった150円しか支払われない。そんなに安い賃金でも大丈夫という考え方があるわけなんですね。

粘土土を機械に入れる作業をする子どもが多いのですが、手袋やヘルメットも支給されなくて、手が巻き込まれて、ケガをし、腕を切断しなくちゃいけない子たちもいます。そして、ひどい時には、ケガしても治療代も払わされずにただ、クビになってしまいます。

ここからシーライツの活動を紹介したいと思いますが、その前に私の出会った少女たちを紹介します。この女の子はシェルターで保護されて、そこから高校に通い、今では、洋服を作る仕事をしています。彼女はお父さんが亡くなってからおじさんとおばさんがやってきて、搾取されるようになってしまいました。タイの国境近くに住んでいたのですけれども、お酒やたばこをタイの国境を越えて運ぶ仕事を言いつけられていました。従わないと、暴力を受けていたのですけれども、それがあまりにもきつかったので、辞めたいと思っていたところ、タイの警察に捕まり、お姉さんは性産業で働くことになってしまったそうです。

もう一人の女の子は、私たちが今、事業をしているベトナム国境のスパイリエン州というところに住んでいます。その村は非常に貧しく、食べていけない家庭がたくさんあるんです。その中で少女は、ベトナムに物乞いに出されていました。路上で暮らすしかなかったのですが、警察に捕まったら、カンボジアに戻されるので、暗いところ見つからないようなところで寝ていたと言っていました。そういうところで寝ていたので、性的搾取、性的暴力を受けていた可能性もあると思います。私たちシーライツでは、そんなことがないように学校に行ってほしいという願いから支援を行なっています。

ベトナムでの物乞いがどれだけ多いかということなのですが、2007年から2009年の間には約900人の子どもたちがベトナム当局から送り返されてきました。

これは私が行ったホーチミンの市場なのですが、男の子と女の子が物乞いをして働いていました。ちょっとインタビューをしたとこ

ろ、この子、とても小柄に見えるのですけれども13歳でした。でもまだ4年生。カンボジアは、5～6歳で働きはじめたりするので、小学校に入学するのがどうしても遅れてしまうということがあります。進級できなくて繰り返すということもあります。、さっきちょっと写ったお姉ちゃんも、もう14歳なのですからけれども、まだ5年生ということでした。実は私たちが支援している地域の学校の生徒だということがわかりました。こういう子どもたちが働かなくても済むようにするために活動しています。

これからいくつかカンボジアのNGOを紹介したいのですけれども、まず最初のNGOがアフエシップというさっきシェルターが出てきたNGOです。女の子や女性が、自分の意志に反して、人身売買の被害に遭った時にそれを突き止めて救出するという活動をしています。そのシェルターで会った女の子はマレーシアに売られていたのですけれども、死んでもいいから逃げ出したいと思ったそうです。見張りの男性に見つかったときに、たばこを押し付けられたりもしたのですが、勇気があったのと運が良かったために逃げ出すことができました。多くの場合は、この女の子もそうなのですからけれども買春宿から買春宿へ売られてしまっていたので、逃げ出しても、道に迷って家には帰れないと諦めてしまいます。

このシェルターでは、洋裁の訓練も行われていて、この2人は姉妹で保護され2人とも洋裁ができるようになっていました。特に右のお姉ちゃんの方は、皆のリーダー的な存在になっていました。また、ここではアートセラピーも行なっています。

彼女はベトナムの女の子で、騙されてカンボジアに売られて来たのですけれども、売春させられている時に様々な暴力を受けていました。客に笑顔を見せないと電気ショックだったり棺桶の中に入れられたりする拷問を受けていました。しかしアフエシップに救出されて、勉強した

後に、今ではスタッフとなって働いており、サバイバーの女性たちのリーダー的な存在となっています。

そういう被害を受けた少女や女性が作った、クロマーというスカーフとか服とか小物を、海外に売って、給料を得て自立しようとしています。シーライツでは彼女たちの作った製品をニュースレターで紹介していますので、それを買うことで、国際協力をすることができます。

二つ目のNGOは、フレンズ・インターナショナルというカンボジアで始まったNGOです。今日お配りした、小さいリーフレットは、チャイルドセーフ・トラベラーガイドというもので、フレンズが制作し、シーライツが日本語訳しました。7つの方法でカンボジアの子ども、中でもストリートチルドレンを助けることができると提案しています。その1つは、物乞いをしている子どもたちに絶対お金を与えず、また、物を売っている子どもたちから絶対物を買わないでください、というものです。なぜだか分かりますか。私も以前は買っていました。しかし、子どもたちから買い続ける限り、物乞いの子どもたちにお金を与え続ける限り、子どもたちは路上で働かされ続けてしまいます。子どもはかわいそうだから、お金をあげる、物を買うという人がいる限り、子どもが働きに出されます。フレンズは、世界的にこのキャンペーンを展開していて、ジュネーブの国際空港でも、このトラベラーガイドを配っています。皆さんも、海外旅行に行かれるときは、これを持って行ってほしいです。子どもを売春させているようなバーとかレストランには入らないでくださいという提案も書いてあります。

フレンズのもう一つの活動は、運転手さんたちの意識と行動を変えることです。子どもを狙うセックスツーリストが子どもに声をかけてゲストハウスに連れていくときに乗る乗り物はトゥクトゥクだったり、バイクタクシーだったりするのですけれども、そういう乗り物の運転手にトレーニングをおこなって絶対にそういう客を乗せないようにするよう

はたらきかけています。乗せたら子どもがひどい目に遭うとトレーニングをし、また、乗せないだけじゃなくて、そういう人を通報することを奨励しています。そういうトレーニングを受けた運転手さんたちは、自分たちがそういうことを防ぐことができていると嬉しいというとても頼もしい発言をしています。

最後に、農村における子どもの人身売買、児童労働の防止活動を紹介します。これは、子どもたち自身が、子どもの権利、つまり、自分たちには、児童労働や性的搾取、人身売買から守られる権利や、学校に行きたいと言ってもいい権利があるということを知るようにすることです。そして、人身売買の手口を学び、それらを周りの友達に伝えていくという子どもから子どもへ伝える活動を支援しています。これをピアエジュケーションと呼んでいます。

たとえば、中学生の女の子が児童労働の軽い仕事と子どもが従事してはいけない、重い重労働の違いを学んだあとに、友達に建設現場で働いている友達に、あなたの年齢でこんな重い仕事はするべきじゃないと話して、辞めさせることができている。あるいは出稼ぎに行く前にちゃんと情報を得て、安全であることを確かめてから出稼ぎに行くようにはたらきかけています。

今、カンボジアには経済特区というものができて、私たちの事業地近くにもできて新しい工場が立ち並んでいます。その結果、もっと中学校に通いたかった友達が学校をどんどん辞めて減ってきているという状況になっています。大事なことは、子どもだけでなく、村の人たちが、この子どもの権利をしっかりと知っていくことなんです。そのためのトレーニングもおこなっていますが、地域のリーダーたちは、農業で借金をしている家族はその借金の返済のために子どもたちを働きに出すことが多いと言っていました。そういうことをしないように説得するのが地域のリーダーの役割です。子どもを出稼ぎに出そうとしている家族がいた

ら、子どもと先生と一緒にあって、説得することが大事です。

子どもにも、参加の権利、つまり親に対して、あるいは、地域のリーダーに対して意見を言ってもいい権利があるということを伝えています。子どもの権利条約というのは、使わないと意味がありません。皆さんは大人になってしまったので、今度は身近な子ども、あるいはご自分の子どもに将来伝えてほしいのですけれども、政府が批准している条約というものは憲法と同じくらい大事なものだということです。ですので、それを拠り所にして、自分の権利を主張することができます。カンボジアの子どもだったら、私はまだ学校に行きたいとか、人身売買から守られたいということを言ってもいいのです。そういうことを、カンボジアの子どもにも日本の子どもにも知ってもらいたいです。日本の子どもであっても、今は教育虐待という言葉で表現されていますが、成績が良くないとお父さんお母さんから虐待される子どもがいます。そういう子どもたちには、「私は、お母さんお父さんのために勉強するんじゃない。自分のために勉強する」というようなことを言える権利があるということを知ってほしいと思います。

社会全体が、子どもの権利について認識し、子どもの権利を守るのは私たちなんだという意識をきちんと持つことが大事になってくると思います。つまり、カンボジアだったら、6歳になったら、子どもを働かせるのはやめて学校に通わせなければならないということをみんなで考えられるような、そういう社会にしていくことが大事です。

具体的にシーライツが支援をしている子どもたちがどういう子どもたちかを紹介したいと思います。例えばこのテアリーという子は、お父さんお母さんは野菜とか魚を細々と売って生活しています。子どもが、病気になったときに、治療費がなかったために、子どもをベトナムに物乞いの出稼ぎに出さざるをえなかった。でも今はシーライツの支援を受けて、母親は、娘たちが仕事に就いてほしいから、学校にも通ってほし

いと考えています。この女の子は読書が好きで、学校に通い続けたいと言っています。

それから、この子はソフィアちゃんですけれども、将来学校の先生か看護師さんになりたいと言っています。理由はお母さんが病気のときに看病できるからということです。今、通学支援を受けているのですけれども、この家族の場合も、お米が20袋収穫できたとしても、そのうちの15袋は化学肥料や農薬などの借金の返済に当てなくちゃいけないということです。今、シーライツでは、化学肥料や農薬を使わないような農業技術を指導しています。このロムドールちゃんは、将来、自分が工場で働いて家族が十分食べられるようになってほしいと言っています。そして、お米をお腹いっぱい食べたいと言ってるんですね。これを聞いて、お米だけでもお腹いっぱい食べたことないのか、と思い、胸が詰まりました。このお母さんも、貧しいけれども、今後も子どもたちに教育を受けさせたいと思っているということでした。

カンボジアの警察も、人身売買取締班を設置したり、研修を行ったりして、だんだん意識が高くなり、さきほども述べましたが逮捕、起訴、そして、有罪判決という法執行をきちんと実行するようになってきています。

国連でもユニセフが、弁護士のトレーニングをしたり、あるいは、地域のネットワークを作ったり調査をおこなったりしています。そして、IOM (International Organization for Migration) という国際移住機関も人身売買の被害者を保護したり教育をおこなったりしています。あとはILO/IPEC (国際労働機関の児童労働撲滅計画) というところも、子どもから子どもへの啓発活動や、子どもから社会への提言活動を支援したりしています。

子どもたちは、政府に対して、市民社会に対して、子どもに対して様々な意見を言っているんですが、政府に対しては汚職をなくしてほしいと

か、子どもの権利のことをもっと広めてほしいと提言しています。子どもに対しても自分の持っている権利と責任についても、もっと気付いてほしいという意見を言っています。

私たちシーライツは『子どもにやさしい社会』の実現をめざしているのですが、一言で言うと、子どもや、子どもを産んだお母さんが、生まれてきて良かったと思ひ、生まれてきて良かったね、と言えるような社会です。

そのためにも、子どもの声に耳を傾けられるような社会になることが必要だと思います。つい最近、テレビで、保育園の子どもたちの声がるさいという苦情が来たために、保育園の園庭で子どもたちが遊べなくなり、屋内で遊んでいると報道されているのを見て驚きました。本当に子どもの声大切にされてない社会になってしまったと非常に残念に思いました。

最後に、バンコクに住んでいたときに、目にした記事を紹介したいと思います。これはネーション（‘The Nation’）という英字新聞のトップ記事でこの男性はアジアの子どもたちを性的搾取し、その場面をブログにアップしていたのですけれども、自分の顔の写真を加工して身元を隠していました。それが専門家の技術によって、写真をオリジナルに戻すことができ、顔が割れて、カナダ人の男性であることがわかりました。そして、この人物がタイに入国したということが分かり、子どもたちを性的搾取した罪により、国際指名手配されました。記事ではタイ警察がこの男性がHIV感染者であるかもしれず、これ以上子どもたちが犠牲にならないように、必ずすぐ逮捕すると話していたことが紹介されていました。そして、その10日後に見事にこの男性は逮捕されました。この事件から、国際社会、そして私たち市民が、子どもを守りたいと強く思えば、それが可能であり、そういう子ども最優先の社会をつくることのできるのだということを感じることができました。皆さんも、是非、

子どもを守ることが優先されるような社会をつくっていくことに参加していただきたいと思います。

最後に、皆さんにできることを提案したいと思います。まず、今日お話したような事をもっと周りの人に伝えてもらいたいということです。そのためにも学習会を開いたり、シーライツが行なっているボランティアミーティングに参加したりしていただければと思います。あるいは、シーライツのスタディーツアーに参加したり、今日お配りした、パンフレットで紹介していますが、時間はないけれども支援したいという方は、一口、月1,000円から始められるマンスリーサポーターにぜひなっただけたらと思います。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。